

●スタッフ●

脚本・撮影	河本浩志
同時録音	林 渉
記録	原 真理子
編集・録音	PADEOH
タイトル	元吉玲子
現像	東洋現像(京都)
協力	大阪藤井寺市山岡家 秀島弘恭 森尾正司 稻見俊雄 いのうえきよたか ワタベスタジオ

《1979年度カラー・16ミリ作品》

●第4回ばでお企画制作作品●

監督／河本浩志

—DÉJÀ VU の世界—

# 兎が眠っているよ

—うさぎがねむっているよ—

例えば、  
あの  
勤勉と称えられた  
力メは  
どんな気持ちで  
眠っている  
ウサギの  
横を通り過ぎて  
行ったのか……。

●キャスト●

マサオ	本田孝昭
ユミ	宮原ひとみ
タケシ	佐藤 樹
テニスコーチ	太田鋭二
東京から来た2人	稻見俊雄
川本	津崎由美子
安隆	森尾正司
女子高校生	小沼英一
	阪本京子
	川崎朋子
	田中賀子
	谷村直美
	辻野朱美
	仲千恵子

## ●ノート●

こんな話がある。

或る晴れた日、ウサギとカメが競走することになり「あそこに見える小高い山」に向かって走り出す。競走とはいえ、しかし誰の目にもウサギの勝利は明らかであった。一方、競技は予想を上回る激しさでウサギが優勢であった。それでもカメは自分なりの早さでゴールの小高い山へと、他には目も呉れず急いだ。ウサギにとっては、元々この競走は遊び同様であり、事実カメなど相手にならず、つまらなくなり途中で一休みすることにした。それは神の休息の日に当たっていたのかもしれない。カメの方は、といえば相変わらず自分の早さでただゴールへと急いだ。そしてウサギが神の休日を楽しんで眠っている間に、カメはゴールインしてしまった。ウサギが目覚めた時には、もう事が終えていた。皆はこのカメの勤勉を称えて止むことを知らなかつたと言う……。

このウサギとカメのむかしばなしは、それにまつわる教訓と共に、余りに有名である。この話をそれなりに準えてゆくと「競走=人生の過程」「小高い山=ささやかな仕合せ」という所だろうか。ウサギは自分の能力に甘えてしまい、カメはそれに酷しかった、という事にでもなろう。

ところで、或る日こんな記事を目にしたことがある。或る日本人の若い男が中国を訪れ、縁あって中国の子供達と話をする事があった。男は中国の子供達に日本のむかしばなしをせがまれた。そこで思いついた話が、この「ウサギとカメ」の話であった。男が話を始めると、中国の子供達は瞬きも疎かにその話に聞き入った。……男が話し終えると、子供の1人が、皆を代表するかの様に次の質問をした。——「わからないことがあるんです。なぜカメはウサギをおこさなかつたのですか？」——そこで日本人の男が答えることになる訳だが、記事はここで終わっていた。その男がどの様に答えたのか、いや答えなかつたのかは分から無いが、それがどの様な答えであったにせよ、間違っていたことは確かだろう。このむかしばなしは語らしめようとした教訓とはまた違う処に、もう1つのテーマが隠れていたのである。するとさしづめ、カメは勤勉にかまけた排他主義者ということにでもなろうか。今の日本でも、自分1人で頑張って突っ走る程取り残されてゆき、淡々と生活していると皆の流れに乗ってゆけるところがあるだろうと思う。走れば走る程1人になる。自分であればある程、孤独になる。そしてあらゆる面においても、眠っているものを敢えて起こそうとは言わないが、「何故ウサギを起こさなかつたのか」という疑問に到達しがたい日本の現代社会、いや日本という社会構造にこそ、もしかしたら問題があるのかもしれない。あの勤勉と称えられたカメが、一体どんな気持ちで眠っているウサギの横を通り過ぎたかを考えみると、恐ろしくさえなってこないだろうか……。

この映画は、そんなことを考えながらデジヤ・ヴュ (déjà vu 既視感) の世界を借りて展開されてゆく。何ということも無い物語が進行し、種々の眠っているウサギを想定しながら、独特のユーモアと目まぐるしいカットの渦の後、そして幕は閉じられる。

## ●ストーリー●

大阪の或る朝、1人の若者（マサオ）が路上を走っている。ふとしたことで、登校中の女子高校生のグループに絡まれたマサオは、その内の1人に頭をカバンで殴られ、路上に気を失ってしまう。マサオが気が付いた時には、彼の彼女であるユミの漕ぐ自転車の後ろであった。そんなマサオに向かって——気を失うてた間どんな夢見てたん？——とユミは聞くが、マサオは——別に見てへん——の一点張りである。実際、マサオは夢に心当たりはないのだったが、ユミには、彼が隠しているとしか思えず、そんなことで喧嘩別れしてしまう。

マサオは友達に遇うその度に、『夢』のことを聞かれる。彼はそんな言葉に嫌気がさしてくる。その友達がタケシであり、そして1人に安隆という友達がいた。安隆はマサオに「ウサギとカメ」の話ををする。中国の子供達の前でこの話をした日本人が子供達に「なぜカメはウサギをおこさなかつたの？」と質問された話を……。そして、原付きバイクに股がると、東京へ向けて出発してしまう。『東京へ…』という旧びた捨て台詞を残して……。後日、安隆が国会議事堂の門に正面衝突して死んだとユミの口から聞かされ、マサオは愕然としてしまう。何故彼は『国会議事堂』にぶつからなければならなかつたのか。事故か？自殺か…？それとも何かに憤りを感じての抵抗だったのか？タケシとユミは、安隆が沖縄の出身であることを絶好の理由に『矢張り自殺』と決め込む。マサオはそんな2人の論理に割り切れないものを感じるが、彼にもそれがどのように割り切れないのか、計り兼ねたのだった。

その日の夕方、電車を待つホームでマサオは、ユミと安隆の関係をユミ自身から聞かされるが、彼はただ啞然としてしまうだけである。そんな時、ユミはマサオに呟くのだった。——その日本人、何て答えたん？——そのユミの言葉は、マサオにはただ愚かしく響くだけであった。

そして次の瞬間、マサオはユミの自転車の後ろに乗っていた……。  
《上映時間=32分》